

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01081

研究課題名（和文）ビルマ古典歌謡における口頭伝承システム：口唱歌と音楽構造の記述研究

研究課題名（英文）The Oral Transmission System of Burmese Classical Songs: the Descriptive Study of Mouth-music and its music structure

研究代表者

井上 さゆり（Inoue, Sayuri）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：40447503

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ビルマ古典歌謡の伝承手段である口唱歌と口唱歌が伝える音楽構造を記述・分析し口頭伝承の構造を明らかにすることである。口唱歌とは楽器音を言葉で伝えるもので、世界各地の音楽伝承で見られる伝承手段である。本研究ではフィールド調査を2回実施し、口唱歌とそれに対応した音楽の最小単位である「アクウェット」との関係に焦点を絞ってその記述と分析を進めた。その結果、数多くの「アクウェット」が伝承の中で奏者に記憶されることによって、口唱歌でそれを指示するだけで音楽を伝えることが可能となり、また同一の「アクウェット」の多数のバリエーションも記憶することによって演奏時の即興性が出現することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽伝承に関する研究は音楽学や民族音楽学、文化人類学の分野で大きな関心のひとつである。本研究では、現在に至るまで伝承され演奏されているビルマ古典歌謡が、伝承され記憶されることを可能とする音楽構造と伝承の仕組みを、口唱歌と「アクウェット」と呼ばれる音楽の最小単位の関係に着目して分析した。口承の構造を具体的に明らかにした点で、音楽伝承研究における学術的意義があるといえよう。また、特定地域や集団の文化の伝承が、構造を持った記憶を伝え、それを伝承される側が蓄積していくことによって為されることを明らかにしたことは、昨今特に唱えらえる多様性を考える上でも有意義である点で社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to describe and analyze the oral transmission of Burmese classical songs through mouth-music and the musical structures conveyed by this mouth-music, in order to elucidate the structure of oral traditions. Mouth-music refers to the practice of conveying instrumental sounds through words, a transmission method observed in musical traditions around the world. This research involved three field studies conducted in Myanmar, focusing on the relationship between mouth-music and the smallest musical unit corresponding to it, known as "akwet." The study found that numerous "akwet" are physically memorized by performers within the tradition, enabling the transmission of music simply by indicating them through mouth-music. Additionally, it was revealed that memorizing multiple variations of the same "akwet" leads to the emergence of improvisation during performances.

研究分野：音楽、民族音楽学、文学、文化人類学

キーワード：ビルマ ミャンマー 古典歌謡 竪琴 楽譜 記憶 口唱歌 口頭伝承

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初まで研究代表者は2004年度以降、科研費補助金によって一貫してビルマ古典歌謡に関する歴史文書、一次資料の調査収集、音楽実践の体的調査、それらに基づく研究と発表を行ってきた。本研究前に実施した科研費研究は次の通りである。2004 - 2006年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「ビルマ歌謡創作の営為：18 - 19世紀における歌謡創作概念の分析を中心として」。2007 - 2009年度若手研究(B)「ビルマ歌謡におけるジャンル形成：18 - 19世紀の歌謡創作技法の分析を中心として」。2010 - 2013年度若手研究(B)「ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成：歌謡集写本と旋律の分析を通して」。2014 - 2017年度基盤研究(C)「ビルマ古典歌謡における伝承と創作：写本と楽譜の分析を中心として」。2018 - 2020年度基盤研究(C)「ビルマ古典歌謡における口頭伝承システムと口唱歌の記述研究」である。さらに、その間、次の2冊の単著を発表した。2010年度研究成果公開促進費 学術図書、『ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成』、大阪大学出版会。2012 - 2013年度研究成果公開促進費 学術図書、『*The Formation of Genre in Burmese Classical Song*』、大阪大学出版会、である。以上の研究過程の中で、本研究開始当初は、研究代表者は書承と口承から為されるビルマ古典歌謡の伝承システムについて研究を行っていた。

ビルマ古典歌謡の伝承は基本的に口頭伝承でなされてきた。歌詞は歌謡集として文字にあらわされ記憶の補助となってきたが、楽器演奏の習得は師が示した見本を真似する、聞いた音を再現するという方法で為されてきた。その伝承で重要な役割を持つのが口唱歌である。ビルマ語では「バザッサイン(口の楽器)」と呼ばれる。口唱歌は楽器で奏する単音、和音、リズム、指使いを伝えるものである。研究代表者が2018 - 2020年度科学研究費補助金として2019年に半年間マンダレー市に滞在して口唱歌の指導を受けながら記述していった中で、口唱歌は個々の音を伝えるだけでは十分には機能せず、音楽の最小単位である「アクウェット」と対応して用いられることで機能すること、すなわちアクウェットの習得と記憶が口頭伝承の核であると認識するに至った。古典歌謡は歌唱部と楽器伴奏部から成り、アクウェットは、1拍から2拍程度の楽器伴奏のフレーズを指す言葉である。図1は古典歌謡の豎琴演奏部を示した楽譜であり、カナが口唱歌で、四角で囲んだ範囲の音がアクウェットと呼ばれる単位である。どんなに複雑な曲もこのアクウェットの組み合わせから成る。口唱歌はアクウェットの単位で唱えられることで初めて伝承の機能を持つ。

実際に楽器の訓練を受ける際にはこのアクウェットの指使いを徹底的に叩き込まれる。習得したアクウェットは同一の曲の中にも、他の曲にも頻出するため、記憶が強化されていき、聞けばすぐ弾けるようになっていく。

古典歌謡の伝承は、研究代表者が2014 - 2017年度科学研究費補助金で明らかにしてきたように、マンダレー市のドー・キンメイ氏とその弟子間において手書き楽譜での伝承実態も見られる。しかし、楽譜を用いる場合でも、ドー・キンメイ氏は楽譜の中の全てのアクウェットを口唱歌で弟子に示す。弟子はその口唱歌によってアクウェットを思い出し、口唱歌による指示のみで演奏ができる。研究課題の核心をなす学術的「問い」をまとめると、ビルマ古典歌謡の口頭伝承を可能とする音楽構造は何か、そして伝承において口唱歌とアクウェットはどう機能するか、である。研究代表者が2007年来師事している豎琴演奏の師であるドー・キンメイ氏は存命中最も古い世代に属する奏者であり、曲を口唱歌で唱えられる希少な音楽家でもある。本研究開始時点で79歳と高齢の氏の口唱歌を引き続き集中的に記述する緊急性もあり、本研究課題に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ビルマ古典歌謡の口頭伝承手段である口唱歌を、個々の音の説明に留まらず、それが運用される音楽構造の初めての全体的な記述を行うことである。口唱歌に関する従来の研究は、主音、主音と3度下の音との和音、主音と9音下との和音等の基本的な口唱歌についてのみ断片的な記述しかなされておらず、さらに複雑な和音や装飾音、演奏パターンを伝える口唱歌については全く記述されていない。実際の曲の複雑な構造を口唱歌でどのように伝えていくかについても、全く考慮されていない。本研究では、伝承と記憶を可能とする口唱歌とアクウェットの分析に基づき、伝承システムのダイナミズムをさらに精緻に提示することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の方法は以下の四つである。

(1)マンダレーの豎琴奏者ドー・キンメイの豎琴の口唱歌による伝承を研究代表者自身が受け、口唱歌とそれが指示する音の対応の記録を進めた。(2022年8月24日 - 9月21日、2023年8月24日 - 9月21日)。

(2)ドー・キンメイが弟子に口頭伝承で古典歌謡の歌及び豎琴演奏を教える様子をビデオで記録し、アクウェット、それを指示する口唱歌を記述した。(2022年8月24日 - 9月21日、2023年8月24日 - 9月21日)。また、2022年度はコロナ禍や政情不安のために中止されたが、2023年度9月5日には毎年開催されてきたドー・キンメイの夫である故ウー・ミンマウンを偲ぶ会

がヤンゴン市パレーミョーティッにあるフラードー僧正の僧院にて大々的に開催され、そこでの演奏に先立ち、研究代表者はドー・キンメイと共に5日間滞在して、著名な歌手のドー・イーイタン、ドー・フニンイタン、ドー・トゥーザーアウンより共演のための訓練を受けた。その間、他の音楽家らの口唱歌についても記録を行った。

(3) 2010-2013 度科研費にて撮影した故ウー・ミンマウンの手書き楽譜約 3000 枚の整理を引き続き行い、アクウェットの抽出と口唱歌の記述を進めた。

(4) 豎琴演奏におけるアクウェットとドー・キンメイの用いる口唱歌の記述を行い、その体系を明らかにした。具体的には、各音および和音、装飾音、演奏パターン、特定の旋律それぞれを口唱歌で表現する際、アクウェットの単位をどう示しているかを分析した。

以上の四つのうち、(1) は本研究の要の作業である。研究代表者は1999 年以降 20 年あまりビルマ古典歌謡の歌唱と豎琴演奏の実技の訓練を受けてきている。研究代表者自身が口頭伝承でビルマ古典歌謡を学ぶことは、研究代表者がビルマ古典歌謡の口頭伝承の構造を体得的に理解するに至った重要な作業である。さらに(3) も以前の科学研究から続けている研究代表者の研究の柱となる作業である。資料が膨大なため、作業が続いている。口頭伝承で発生する多くのバリエーションを大量の楽譜に残した故ウー・ミンマウンの手書き楽譜は、アクウェットのパターンの抽出においても非常に重要であり、本研究にとって最重要といえる資料である。

4. 研究成果

研究代表者は研究期間中に現地調査を2回実施した。2022 年度(2022 年8月24日 - 9月21日)及び2023 年度(2023 年8月24日 - 9月21日)である。本科研の申請時には2021 年度も現地調査を実施する予定であったが、コロナ禍に続くミャンマーの政情不安のためビザが発給されず渡航することができなかった。

現地調査時には、「3. 研究の方法」で述べた調査・分析を行い、本研究の目的を一定程度達成することができた。すなわち、アクウェットのパターンが口唱歌によってどのように指示されるかを示し、音がアクウェットの単位で伝承され記憶されることを明らかにした。口頭伝承を可能とするのはアクウェットの単位であり、さらにはそのバリエーションをいくつも記憶していくことが演奏における即興性をも可能としていることを明らかにした。以上の研究成果を国際学会にて3回にわたり口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 INOUE Sayuri	4. 巻 34
2. 論文標題 Creating Literary Works in the Burmese Court: Analyzing U Sa's Anthology in Palm-leaf Manuscripts	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Occasional Papers (Institute of Asian, African, and Middle Eastern Studies, Sophia University)	6. 最初と最後の頁 31-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Sayuri Inoue
2. 発表標題 Transmission and Memorization of Myanmar Classical Songs: with Special Reference to Akwek or the Smallest Units of Music
3. 学会等名 6th Symposium of the ICTM Study Group on Performing Arts of Southeast Asia, online, Taiwan (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sayuri Inoue
2. 発表標題 Producing Variation in the Performance of Myanmar Classical Songs: Focusing on the Transmission and Memorization System
3. 学会等名 46th ICTM (International Council for Traditional Music) World Conference, Lisbon, Portugal (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sayuri Inoue
2. 発表標題 What are the Norms? The Range of Variations in the Performance of Myanmar Classical Songs
3. 学会等名 47th ICTM (International Council for Traditional Music) World Conference, Legon, Ghana (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

オンライン記事
「ミャンマーの僧院での豎琴演奏」2021年9月10日 (<https://jsatnavi.jp/atcl/d0561e51-99b5-48cb-ae64-d1a5c0e64f3a/5ddf697b-6d8a-445e-8ccc-869bf1105302>)
「ミャンマーにおける豎琴のポピュラー度」2021年11月8日 (<https://jsatnavi.jp/atcl/d0561e51-99b5-48cb-ae64-d1a5c0e64f3a/e586d459-efa4-4993-88fb-6cb0f291d147>)
マイポータル
https://researchmap.jp/INOUE_Sayuri
ウェブサイト
Myanmar Classical Music
<https://sayuriinoue.myportfolio.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------